

## クライアントのニーズに応じた支援 — スクールカウンセリング実践からの報告 —

目白大学人間社会学部 日高 潤子  
埼玉大学教育学部附属 教育実践総合センター 尾崎 啓子

### 【要約】

スクールカウンセラーの職務内容は、学校コミュニティのニーズに応じて多岐にわたる。個人を対象とした「カウンセリング」はそのひとつであり、慎重に実施されるべきであると同時に、効果的であることも求められている。

本研究は、スクールカウンセリングにおける「カウンセリング」が効果的であるために、何が重要であるかを検討することを目的とする。

研究方法は、スクールカウンセラーとして学校内で行った4事例を対象とした事例研究法であり、クライアントのニーズをスクールカウンセラーがどのようにアセスメントし、それに応じたかという観点から考察を加えた。

その結果、スクールカウンセリングにおいて効果的な「カウンセリング」を行うためには、スクールカウンセラーが潜在的なものも含めたクライアントのニーズをアセスメントできていること、自らの役割を限定せず、クライアントの多様なニーズに柔軟に応じられていること、クライアント個人のニーズを学校コミュニティのニーズの文脈の中で認識できていること、自らの活動の意図を学校コミュニティおよびクライアントのニーズとの関連において学校関係者に説明できることの重要性が示唆された。

キーワード：スクールカウンセリング、ニーズ、効果的支援

### I. 問題と目的

スクールカウンセリング事業は、平成7年度から12年度にかけて実施された活用調査研究段階を経て、13年度から本格的に制度化の運びとなった(村山,2001)。

この事業の導入は、教育界にとり画期的な改革であったといわれる。しかし、教育界にとってだけでなく、従来クリニック・モデルでの臨床が主であったわが国の臨床心理界にとっても、この事業への参入は個人からコミュニティへと視野を開かれた新鮮な経験だったのでないだろうか。

スクールカウンセラー(以下SCと略す)の職務内容は、「①児童生徒へのカウンセリング、②教職員及び保護者に対する助言・援助、③児童生徒のカウンセリング等に関する情報収集・提供、④その他児童生徒のカウンセリング等に

関し各学校において適当と認められるもの」の4点があげられている(学校臨床心理士ワーキンググループ,1997)。

実践をとおして抽出されたSCの役割・機能としては、黒沢(2000)が「①狭義の相談活動(教育相談、カウンセリング・ガイダンス)、②コンサルテーション、③心理教育プログラム、④危機介入/緊急対応、⑤システム構築」の「五本柱」を提唱している。

これらの職務内容を行うにあたっては、スクールカウンセリング活動が学校コミュニティへの援助である以上、学校コミュニティのニーズ・アセスメントが重要となる。SCは、地域や学校、学年やクラス、さらに児童・生徒、教職員、保護者などの個人といった、階層をなす各システムのニーズをアセスメントし、それに応じたサービスを提供することを求められてい

る(鵜養,1997)。

そしてそのSC活動に対する評価は、SCが何をどれだけやったかではなく、むしろ学校コミュニティの生活者である児童・生徒、教職員や保護者がSC活動にどれだけ満足したかによって左右されることが示唆されている(伊藤,2000)。ここでいう利用者の満足度は、SCがどれだけ的確に学校コミュニティの顕在的/潜在的ニーズのアセスメントとニーズにフィットした援助(黒沢,1998)をなしえたかに依存していると思われる。

さて、SCの職務内容のうち「①児童生徒へのカウンセリング」、黒沢(2000)のいう「①狭義の相談活動」は、心理臨床家にとってなじみ深く、得意とするものであろう。しかし、黒沢によればこの活動は、「スクールカウンセラーの仕事全体のおそらく30%を占めるにすぎないものである。また、学校臨床心理士ワーキンググループ(学校臨床心理士ワーキンググループ,1997)が定めたガイドラインも、「最初から安易にセラピーに手を出」すことを戒め、スクールカウンセラーの活動の中心をコンサルテーションにおくよう勧めている。

ここでSCに求められていることは、単に「カウンセリング」活動の割合を減らすことではなく、「カウンセリング」を行う際の認識の変容であると理解できる。つまり、場から切り離されたクライアント(以下CIと略す)個人を「治療する」という認識から、コミュニティ援助の一機能として位置づけられた「カウンセリング」を提供するという認識である。

後者の認識に立てば、SCはCI個人のニーズを学校コミュニティのニーズとのすりあわせの中で理解することになる。さらにSCは、“今、この場で、この状況で”「カウンセリング」という形態の援助を提供することが、学校コミュニティにどのように影響するのか、その援助にどのように寄与するのかという視点を持つことができる。

この認識が必要なのは、SCがコミュニティ全体のニーズと個人のニーズの両方を視野に入れることを要求されているためである。このことは、河合(1998)の言う「個人から発想して全体へ」というSCの姿勢に通じるであろう。

上述してきたように、SC活動は「カウンセリング」偏重であることを戒められている。しかしそれと同時に、学校コミュニティが必要とする状況においては、効果的な「カウンセリング」を提供することも求められている。そして、SC活動の評価が利用者の満足度に左右されたように(伊藤,2000)、「カウンセリング」の効果もCIの満足度に左右されることが示唆されている(日高,1999)。

そこで本稿では、SCの多様な職務内容のうち、個人を対象とした「カウンセリング」に焦点をあて、スクールカウンセリングにおける効果的な心理支援をCIのニーズに応じた「カウンセリング」という観点から考察することを目的とする。

そのために、筆者らのスクールカウンセリング実践における複数の事例を提示し、検討を加えたい。これらの事例に共通していることは、①「カウンセリング」を行うことは学校およびCI個人双方のニーズに応じるものであるとSCが判断したこと、②SCがCIのニーズに応じたカウンセリング技法や態度を選択し、治療目標や面接の頻度・期間を設定したこと、③「カウンセリング」の結果、主訴の解消、CIにとっての「よい変化」、CIの満足度のいずれかが生じたことである。なお本稿では、保護者に対してコンサルテーション的に関わった事例も「カウンセリング」としてとりあげる。

## II. 心理臨床家としての筆者らの背景

事例を提示する前に、筆者らの心理臨床上の背景について述べておく。

筆者2名は、どちらも「臨床心理士」である。

事例A・Bの提供者は、来談者中心療法を基盤としたアプローチを行う。その他、精神分析的な心理療法、ブリーフセラピーにも関心を持つが、事例Aで用いたような「スケーリング・クエスチョン」などの技法を使用する機会は少ない。

事例C・Dの提供者は、来談者中心療法から臨床をはじめ、のちに家族療法を志向するようになった。解決志向アプローチのトレーニングも受けたが、後述する「虫退治」(東,1997)の

ような技法色の際立つものは得意としない。

### Ⅲ. 事例

以下に提示する4事例は、すべて地方都市の公立校における実践例である。各事例はすべて異なる学校のものであり、内訳は小学校1校、中学校1校、高等学校2校である。

事例中、SC（筆者）の発言を〈 〉、C1の発言を「 」で示す。

なお、個人のプライバシー保護のため、これらの事例の概要は内容に支障がない程度に変更してある。

#### 1. 事例A：動悸への対応法を求めて来談した高2女子

Aは、5月の連休明けに自主来談した。主訴は「朝、通学のために制服を着る頃から動悸がはじめ、高校に着く頃に最も気分が悪くなる。教室に入るとだいたいおさまるが、そのまま保健室で寝ている日もある。理由に思い当たるところはなく、どうにかしたい」であった。

面接1回目に詳しい経緯をたずねたところ、遠距離通学と体育会系部活動の朝練習に出るため毎朝5時半に起きること、起きた時は特に問題はないが、朝食をとり歯みがきをする頃からだんだん胸が苦しくなり、制服を着る頃には動悸が激しくなっていること、父親の車で最寄のバス停まで送ってもらうが、父から話しかけられても返事をするのがおっくうであり、バスの中でもずっと気分がすぐれないことが語られた。さらに、校門をくぐる頃が最も具合が悪くなるが教室に入るとおさまることが多いこと、午後は調子が良くなり、部活動をして夜8時頃帰宅することなどが説明された。

Aは、外見や話し方、態度から、いかにも真面目そうな印象であり、SCは進路選択を控えた学習面でのプレッシャーや部活動による疲れ、家族との葛藤などストレスの蓄積を感じた。〈いろいろなことに頑張っていて、少し疲れているように感じる。睡眠不足もあるようなのでまずはゆっくり休むことを勧めたい〉と伝えると、「休みたいが宿題は多いし、部活動でも副キャプテンなので後輩の面倒をみないといけない。休めない」と言う。そこで、SCが性

格の見直しや生活のふり返りからストレスとの付き合い方を考えるカウンセリングを提案したところ、「それもいいが、私は動悸がなくなってくれたらいいだけ」と話した。Aのニーズは動悸の消滅、あるいは対応法を知りたいという明確なものだったため、週1回、対応法について具体的に話し合うことを目的とした面接を行った。

2回目の面接で、起床から登校までの場面別に動悸の自覚的レベルを10段階で評価してもらい、どの段階で対応することが効果的か、また何段階になればよしとするかを考えた。起床がレベル2、食事がレベル3だが、歯みがきの段階で急にレベル5に上がること、父親の車中は6、登校時は8まで上がるが、教室に入るとまた5から4くらいに下がり、午後は3から2で落ち着くこと、また動悸自体は3から4のレベルに止まっていればよいと思っていることが判明した。SCはAの「レベル3から4くらいになればよい」とする目標が現実的であること、最高レベルの登校時でもレベル10にはならないことの良さをフィードバックした。さらに、歯みがき時に何が起こるのか詳しく自己観察すること、その他の場面で何か例外的なことが起こらないか注意することの2点を宿題とした。

3回目には、歯みがき時に学校での過去のできごとを思い出しては反省し、今後のことを考えて「くよくよしてしまう」こと、車に乗ると学習や部活動のことを「うまくいくのかと悪い方向に考えておちこむ」のに加えて、父親がAの元気のなさに気づき、励ましたり気をつけてくれたりすることがかえって負担になっていることに思い至ったことが報告された。

4回目以降は、歯みがき時における自動思考への対処法や『『例外』探し』（森,2002）について、様々な工夫が話され、笑顔が出てきた。

「動悸の回数が減り、あまり気にならなくなった」ため、面接は8回で終了した。夏休み明けに「もう大丈夫です」との報告があり、3年時の来談はなかった。

2年後、大学進学を伝える手紙が届いた。文中に「SCに性格や生活について見直し、ストレスと付き合う方法を考えるよう勧められたが、当時とはとにかく動悸を何とかしたい思いが

強く、そんな時間のかかることはいやだと思っていた。ただ、数回の面接の中で自分なりに性格を振り返り、何でもネガティブに考えてしまう傾向に気づいたので、生活に活かすよう心がけていたような気がする。大学生になったので時間をかけて気分転換法を探してみたい」とあり、Aの希望とペースに合わせたことが援助的であったことが理解された。

## 2. 事例B：高1の息子の不登校を通じて、自己や家族の状況をふり返った母親

高校入学直後から不登校状態となった男子生徒の保護者として、担任の紹介で6月に来談した。来談意欲は強くも弱くもなく「SCと会うことがIP<sup>(1)</sup>の状態の改善に役立つなら来てよい」という程度だった。職業を持っており、家族の介護も担う多忙な方であったため、1年間の面接期間中、前半は月に2回、後半は月1回の頻度でカウンセリングを行った。

開始当初、IPの家庭での過ごし方や中学校までの様子が話され、兄弟と比較しながら「何故こんなことになったのかさっぱり見当がつかない。中学まではクラスの人気者で、成績もよく、部活動でも頑張っていた。進学校に入ったのも本人の希望で、親が無理強いしたことはない。この学校で勉強についていけないとか、友達ができないとは思えない」という言葉が繰り返された。納得のいかないIPの行動についてBなりに理解しようとする姿勢が伝わってきた。

数回の面接を経て、「今まで反抗期らしいこともなかったIPが、こういう形で自分のことを考えたり、家族に何かを訴えているのかもしれない」と語り、「SCと会っていてもすぐに解決するとは思えないし、学校として、解決しない問題にSCが時間を割くことを認めてもらえるのかもわからないが、自分としてはSCと話すことで考えがまとまったり気持ちの整理がつくので、もうしばらく通ってカウンセリングを受けたい」と希望された。SCは相談部担当教師と話し合い、学校側の了解のもと、Bとの月1回のカウンセリングを行った。

BはIPが生まれてからの育児を中心とした話題で自分の半生をふり返り、介護している姑との関係を語る中から「いつも姑第一で良い嫁

を務めてきた。他の子どもにも何かと手がかかったが、幸いこのIPがとても良い子で手がかからなかったもので、ついつい後回しにしてきた。IPも我慢していたのかもしれない」と気づいた。その後IPが病気をしてBがIPの看病をしたことをきっかけに、IPとB、父親との会話が多くなり、IPは転校を決めた。

Bは1年間をふり返って「SCと話すことで気持ちが落ち着き、IPのこともゆっくり考えることができた。焦らなかつたことがよかった」と話し、カウンセリングを終了した。

## 3. 事例C：欠席がちな小2息子への対応法を求めて来談した母親

IPが運動会のあと学校に行きたがらないということで、11月に自発来談。子どもを学校につれてきたくないとの希望により、SCはCのみと会う。家族は、Cとその夫、IP、弟（小1）の4人。Cの一家は、この年の夏に他府県より転入してきた。Cによると、「弟は元気だがIPは新しい学校になじめず、行きたがらない」「朝は泣き、夜は寝つけないが、休みの日は元気」「これまでに何日かは学校を休ませた」という。<一番ひどかったときを0とすると今の状況は？>と問うと「5」。「担任が交換ノートをしてくれるようになったので学校でのことが前よりわかる」し、「担任がIPをほめてくれるからIPがとてもうれしそうだから」だという。

Cは「IPに（学校へ行きたくない）わけを聞いても『ない』という」「親としてどうしたらよいか」と話す。SCは、IPの気持ちを知りたい、そしてそれに合わせた対応をしてやりたいという思いをCのニーズの表れととらえた。そこでSCは、IPの気持ちを理解する方法の1つと位置づけて「虫退治」技法<sup>(2)</sup>を紹介し、この技法がCに役立ちそうかどうかを話し合った。その結果、Cは技法の一部をとり入れ、IPに虫の絵を描いてもらう作業を家庭で行うこととなった。

2回目にCは、「IPに虫を聞いてみたらこれを描いた。こんなに描くなんて、ビックリした」とIPが描いた絵を持参した。そこには「学校行きたくない虫」「おなかイタイイタイ虫」「かなしい虫」「お母さんとはなれるのさみしい虫」

が描かれていた。弟は「これが兄ちゃんを泣かしているのか」と絵を叩いたという。

虫のことを聞いた後の2,3日、IPは調子がよく、先週は一度も泣かないで自分から登校したという。しかし、「(IPは) 楽しく行くのではない。涙目で出かけていく」という状態であり、Cの願いは「楽しく行ければいい」ということであった。Cの「(今回は) 虫退治の次の段階を知りたい」という要望により、SCが家族全員で虫を退治する儀式のやり方を説明し、Cが家族に教えて行うことにした。

Cは前回の面接を「何をしたらいいかが見えたから、気持ちが落ち着いた」と評価した。今回は「予約を入れなくても大丈夫そう」とのことで、必要に応じての再来とした。

約10日後、SCは担任より、Cから「もう大丈夫だから」と交換ノート終了の申し出があったこと、IPは毎日楽しそうに登校していることを伝えられた。

#### 4. 事例D：中2の息子の不登校で自信をなくしていた母親

教職員からの紹介で、「IPには内緒で」自発来談。主訴は「(この前年に約2ヶ月不登校だったIPが) 今も休みがち。早めに手を打ちたいので相談にきた」であった。DはIPが幼稚園時に離婚しており、現在はDとIPの二人で生活している。SCとは、月に1~2回の頻度で7回の面接を行った。

1回目の面接でDは、昨年秋、IPは2ヶ月間不登校だったこと、そのとき受診した病院ではDが医師から叱られ、ショックで泣いたこと、今年6月頃より再びIPが休みがちなので早めに手を打ちたいことを話した。

SCがこれまでのDの試みをたずねると、朝の起こし方、登校に関する話題のとりあげかた、試験の日の送り出し方など、「パターンを変えているいろいろやって」おり、「困ってカリカリ言ったこともある」が、「それではうまくいかないとわかってきた」ので対応を変え、現在は「だんだん様子がわかってきた」ことが報告された。Dが試行錯誤しながら、うまくいかない対応を避け、うまくいく方法を探っている様子が伝わってきた。そこで、SCはくうまくいっ

ていることは変えない、一度やってみてうまくいったことはくり返しやってみる、うまくいかないなら何でもいいから違うことをしてみる>という解決志向アプローチの「セントラル・フィロソフィー」(Berg,1995)を説明し、<これはDがこれまでもやってきたこと>であるが、<これを続けていくと、IPさんにとってよいやりかたを見つけることができますね>と伝えた。また、Dの観察力の細やかさを見込み、<いつもより少しよいという状況を注意して観察してみてください>と観察課題を出した。

IPの様子としては、学校に行きたくないときは友人関係が気になっているらしいこと、「2ヶ月前から始めたスポーツに1週間前から興味を持ち出した」ことが語られた。校外でのこのスポーツ活動がIPにとって重要な資源であることがうかがえた。

SCは、Dが「医師に叱られた」ことで母親としての自信を失っていること、そのことが現在のIPとの関わりにも影響しているらしいことを言外の雰囲気を感じた。そこでそのエピソードに関しては、Dの「どうして叱られなければならなかったのか。ただでさえ私も参っているところだった。助けて欲しくて病院に行ったのにショックだった」という思いに焦点をあて、共感的にうけとめた。また、<なぜDさんが医師に叱られたのかわからない><なぜなら>とSCから見たDのよさをいくつも伝えていった。

2~3回目の面接時期、IPは担任にうながされて勉強するようになった。また、欠席すると担任が電話をくれることをとても喜び、欠席日数は減少していった。Dとの面接では、今よりさらにIPの欠席が減ること、学校での友人関係がうまくいくことをめざして、IPへの具体的対応を話し合った。

4回目の面接でDはIPに登校を続けていること、「俺スポーツやってよかった。自信ついた」と言い、友人関係もうまくいっていることを話した。IPの当面の問題は解決したが、「1ヶ月に1回くらいは(面接に)通って、ちょっと様子を見たい」というDの希望により、「波があったときの保険のようなもの」としての面接を継続することにした。

5～7回目の面接は、DがIPの様子を報告し、「今困っていることはない」ことを二人で確認し、SCが「次回は○月○日にお待ちしています」と伝えて終わるという流れであった。

7回目には、DがIPに内緒でIPのことを担任に相談し、それがIPにばれたというエピソードが語られた。Dは、「誰にも言わない」という約束を破ったことをIPに謝ったが、同時に「親としての判断だった」ことを伝えたとこ、IPとの関係を修復できたと話した。このエピソードに対し、SCは「Dさんはトラブルが起きたときのいいモデルを示したのでは？」と伝えた。Dは「こういうことは初めてだったが、そうかもしれない」「自分でも大丈夫、しばらく一人でやってみようという気がする」と答え、この日で終結となった。

この時点でSCは、IPが毎日登校し、学校でも生き生きと過ごしているという報告を複数の教員から受けていた。その後IPは校外で続けたスポーツを生かし、高校への推薦入学を果たした。

## IV. 考察

### 1. 事例の考察

#### (1) 事例Aの考察

この事例では、SCとしては動悸がするという現象への対処のみならず、ストレスにどう対処するかという性格面やコーピングを増やす関わりが有効に思われた。しかし、Aのニーズは今困っていること（動悸）への具体的な対処法を知りたいということだった。そこで、「スケールリング・クエスチョン」や「『例外』探しの質問」といったブリーフセラピーの技法（森ほか,2002）を使って対応したところ、動悸の自覚的レベルが低くなるといった一定の効果と満足が得られた。

#### (2) 事例Bの考察

この事例では、SCはIPとは関わることができず、保護者Bとの数回の面接を行ってもIPの状態に変化はなかった。しかしBは継続的なカウンセリングを希望し、学校側の了解も得られたので、1年間にわたり継続面接を行った。

Bのニーズは、SCにIPへの対応を聞くことよりも、むしろ育児や半生をふり返って気持ち

の整理をしたいというものだった。SCはBのニーズと面接の継続に意義を感じて対応した。

SC活動の中心はコンサルテーションが望ましいとする考え方もあり（学校臨床心理士ワーキンググループ,1997）、学校の中で継続的なカウンセリングを行うことについては賛否両論あるが、実際にどのような活動が望ましいかは利用者である学校関係者（児童・生徒、教師、保護者）が決めることが、有効な支援にとって大切であると考ええる。

#### (3) 事例Cの考察

この事例は転校が主訴の背景にあり、新しい環境への適応が意識されていないニーズであると考えられた。そこでSCは、担任との情報交換・コンサルテーションをCの面接と並行して重ね、担任とCとの橋渡しの機能を果たすことで環境調整に一役買った。

また、SCはCの「親としてどうしたらよいか」という言葉を、意欲はあるが何をすべきかわからない状況と理解し、具体的な対応策を提供することがCの意識されたニーズに応じることだと判断した。SCが「虫退治」技法をとり入れたこと、その技法をC自身がIPを含む家族に教えるよう提案したことは、ともにこのニーズに応えようとしたものである。

その結果、Cは「何をしたらいいかが見えた」ために気持ちが落ち着き、具体的方法としての「虫退治」技法にとりくむことができたと考えられる。さらに担任の配慮が相乗効果をあげ、IPの変化につながったと考えられる。

#### (4) 事例Dの考察

来談時のDは、①「早めに手を打ちたい。どのような対応をすればよいか」という意識されたニーズと、②医師に叱られた体験に象徴される「傷つきを癒したい」「失われた自信を回復したい」という意識されないニーズをもっていたと考えられる。また、4回目以降のニーズは、「波があったときの保険」と表現されたように、③いざとなったときの安全基地、駆け込み寺としての機能が求められていたと理解される。

SCからみたDは、いろいろなやり方をためし、その結果を観察し、うまくいくものを採用していくという対処スタイルを持っている人で

あった。そこでSCは、Dがすでに行ってきた対処がより意図的なものになれば、①の「どのような対応をすればよいか」という問いに答えることができると考えた。解決志向アプローチの「セントラル・フィロソフィー」を伝え、観察課題を出したのは、このアプローチがニーズ①にフィットすると判断したからであった。

②に対しSCは、Dが自信をとりもどすことをめざして「医師に叱られた」Dの気持ちを受けとめ、SCから見たDのよさを伝えていった。

③については、面接の流れが定まったパターンになったこと、<次回は〇月〇日にお待ちしています>と面接の場があり続けることを伝えたことによって、求められていた「保険」の機能を果たしたと考えられる。

本事例は、Dのニーズを意識されたもの、意識されていないもの、面接の経過にともなって生じたものに分けてとらえ、それぞれに異なる支援を提供することで主訴の解消とDの満足とを得られた例と考えられる。

## 2. 学校という場における効果的な心理支援

### (1) SCに対するニーズの多様性

スクールカウンセリングの特徴の1つは、SCに対するニーズがきわめて多様で、活動が多岐にわたるということである。学校の状況、児童・生徒、教職員、保護者らが必要としている援助は、SCが想定した活動内容を超えることも多い。

また、「カウンセリング」に対するCIのニーズも多様である。筆者は過去に生徒から、「大学の推薦入試の面接の練習台になってほしい」「不登校を経て転校したいので転校先の見学に付き添ってほしい」「進路を巡って親を説得してほしい」「学校の中で（定期的・継続的な）カウンセリングを受けたい」などの要望を受けたことがあった（尾崎,2000）。

本稿に提示した4事例のうち3事例は、子どもの不登校を主訴として来談した母親の面接である。しかし、主訴を同じくするその3事例においても、CIのニーズはそれぞれに異なっている。そしてそれらのニーズにSCが応じたことで、主訴の解消、CIにとっての「よい変化」、CIの満足感のいずれかが生じている。

このことから学校において効果的な「カウンセリング」を行うためには、SCが潜在的なものも含めたCIの多様なニーズをアセスメントし、それに応じることが重要であると確認できる。

河合（1998）は、「自分の仕事を限定しない」「どんな話が来ても対応ができる」ことをSCの特徴であると述べている。SCの職務内容の1つである「カウンセリング」においても、SCが自らの役割を限定せず、そのよって立つ理論や流派にこだわることなく、状況に応じて柔軟に動けることが効果的な支援につながると考えられる。

### (2) 校内ネットワークの一員としてのSC

スクールカウンセリングの別の特徴は、その活動が児童・生徒、教職員、保護者など多くの人のネットワークの中で行われるということである。

したがって効果的な支援を提供するためには、SCがネットワークの一員として機能していることが重要である。事例Cのように、SCが学校の教職員と連携をとることが直接的・間接的にCIのニーズに応じる結果になる場合も多い。

SCは、ネットワークの一員として機能するために、自らの活動の意図をネットワークの他の構成員に理解してもらうよう努める必要がある。たとえば事例BのようにSCが多く時間をかけた例では、SCがなぜ、数多くいる児童・生徒あるいは保護者の中で、“今、この人に、これだけの時間を”投入するのかを説明できなければならないだろう。そのためには、SC自身が、誰のどのようなニーズに対して何を行おうとしているのかを認識できており、支援効果を含めた見通しを持っていることが必要であると思われる。

## V. まとめ

スクールカウンセリング実践から4事例を提示し、CIのニーズとそれに対してSCが提供しえた支援について検討した。

その結果、スクールカウンセリングにおいて効果的な心理支援を提供するためには、SCが

学校全体とCI個人、双方のニーズを的確にアセスメントすることの重要性が確認できた。

また、SCがCIの多様なニーズに柔軟に応じること、どのようなニーズに対して何を行っているのかを自覚していることが、学校における効果的な「カウンセリング」につながるということが示唆された。

## 引用文献

- バーグ,I.K., ミラー,S.D. 齊藤 学 (監訳)  
1995 飲酒問題とその解決—ソリューション・フォーカスト・アプローチ— 金剛出版  
(Berg, I.K., Miller, S.D. 1992 Working with the problem drinker—A solution-focused approach—. W.W.Norton & Company.)
- 学校臨床心理士ワーキンググループ 1997 学校臨床心理士の活動と展開
- 日高潤子 1999 ソーシャル・サポートとしての家族と支持的面接の効果との関連についての研究 家族心理学研究 13, 15-27.
- 東 豊 1997 セラピストの技法 日本評論社
- 伊藤美奈子・村山正治・学校臨床心理士ワーキンググループ 2000 学校側から見た学校臨床心理士(スクールカウンセラー)活動の評価 臨床心理士報 11 21-42.
- 河合隼雄 1998 スクールカウンセラーに求められるもの 河合隼雄・大塚義孝・村山正治(監修) 臨床心理士のスクールカウンセリング3 全国の活動の実際 誠信書房 4-33.
- 黒沢幸子 1998 公立中学校におけるサポートネットワーク—「援助の専門家」の姿勢: マザーリング・ザ・スクール— 河合隼雄・大塚義孝・村山正治(監修) 臨床心理士のスクールカウンセリング3—全国の活動の実際— 誠信書房 124-135.
- 黒沢幸子 2000 スクールカウンセリング活動の五本柱. 村山正治(編) 現代のエスプリ別冊 臨床心理士によるスクールカウンセラー至文堂 89-99.
- 森 俊夫・黒沢幸子 2002 <森・黒沢のワークショップで学ぶ> 解決志向ブリーフセラピー—ほんの森出版
- 村山正治 2001 6年間にわたるスクールカウンセラー活用調査研究事業の終了と新しい事業への発展—学校臨床心理士ワーキンググループ 第18報— 日本臨床心理士会報 10 (1) 4-6.
- 日本家族心理学会 1999 家族心理学事典 3.
- 尾崎啓子 2000 触媒としてのスクールカウンセラーの機能—役に立つということ—「人間研究」36, 35-40.
- 鶴養美昭・鶴養啓子 1997 学校と臨床心理士—心育ての教育をささえる— ミネルヴァ書房

## 脚注

### (1) IP

「困っている」当事者である「クライアント」に対して、「症状」を呈している人を「IP (= Identified Patient)」と呼び、「確認された患者」などと訳す(日本家族心理学会,1999)。この言葉の背景には、「症状」を呈している個人が問題なのではなく、その人はたまたま「症状」を呈する役割をになっているにすぎないという考え方があ

### (2) 「虫退治」

「問題」や「症状」を個人に帰属させず、家族が互いを責めずに解決をめざせるよう導く技法。「問題」や「症状」の原因は、「虫」が個人の体内に入ったためであると説明し、解決法として家族全員で絵に描いた「虫」を退治する儀式を処方する。

## Support tailor-made to the client's needs A report based on school counseling practice

Junko Hidaka Mejiro University, Faculty of Human and Social Sciences

Keiko Ozaki Faculty of Education Saitama University Integrated Center for Clinical  
and Educational Practice

Mejiro Journal of Psychology, 2005 vol.1

### Abstract

This research aims to examine what is required for 'counseling' to be effective. The research was based on a case method, with four case studies of school counseling conducted within a school. The study was conducted from the perspective of how the school counselor assessed the needs of the client and whether or not he/she was able to meet these needs.

The study found that it was necessary in order to conduct effective counseling, for the school counselor to be able to assess the client's needs (including subconsciousness), and to be able to meet those diverse needs in a flexible manner (without preconceptions or posing limits to his/her own role). The counselor must be able to not only understand the client's individual needs, but rather be able to put these into the context of the school situation.

The importance of being able to explain how the school counselor's purpose relates to the school community's needs, in general, and the client's needs, in particular, to the school community has become obvious.

**Key words** : School counseling, needs, effective support